

Title	印度支那の民族と文化(松本信廣著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	竹田, 龍兒(Takeda, Ryuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1944
Jtitle	史学 Vol.22, No.4 (1944. 11) ,p.118(488)- 119(489)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19441100-0121">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19441100-0121</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

冗談はさて置き、本書は故人の學殖を追憶するにまことによき論文集であり、本書の出版に盡瘁された山田氏の勞苦に謹んで感謝するものである。(松本信廣)

### 印度支那の民族と文化

(松本信廣著  
岩波書店發行)

著者は人も知る如くわが東洋學界に在つて常に新しい分野の開拓に力を盡され、殊に西南アジアの民族・文化・言語等を研究せらるゝこと己に歳久しいものがある。従つてこの方面の研究に於て著者は先覺者たるの榮譽を擔つてをられるのであつて、今日斯界の第一人者として重きをなしてをられるのも決して偶然ではないことを知らねばならない。

本書は著者が十數年來種々の機會に發表せられた論文八篇と著者の翻譯になるシュミット師の「日本語とオーストリツシュ語との關係」なる一文とを収録したもので、今日時流に乗じて盛んに世間に賣り出される際物とは全くその類を異にしてゐる。

本書の本文の目次をこゝに掲げれば(一)印度支那の民族 (二)印度支那の文化 (三)上代印度支那の考古學的研究に就て (四)有肩石斧の諸問題 (五)印度支那の言語系統 (六)江南の古文化 (七)日本上代文化と南洋 (八)チャムの椰子族と「椰子の實」説話、となつてゐる。何れも著者の多年にわたる研究の成果ならざるはなくすべて純學術的な立場に於て書かれたもののみである。従つて(三)(四)(五)(六)の各篇の如く考古學や言語學の素養がなくては充分にこれを理解する事が困難ではないかと思はれるものを見受けられる。然し(一)(二)(七)(八)の四篇は左程専門的な知

識を必要とはしないから何人にも容易に理解することが出來、相當興味を以て讀まれるに相違ない。

(一)の「印度支那の民族」に於ては印度支那半島に住む安南人・チャム人・カンボヂヤ人等十五種族について一々その住地・人種系統・人口・風習などが説明されてゐて、複雑な印度支那諸民族の概要を知るには最も好適である。

(二)の「印度支那の文化」は著者がその附記(一五六頁)に於て自ら言つてをられる如く主として安南を中心に印度支那の文化を概説したもので、古代の部分に於て詳しく近代に關して疎であるといふ憾みもないではないが、今日この方面のことを知らうとする者にとつては最も信頼すべき著述たるを失はない。

(七)の「日本上代文化と南洋」の一篇は實のところ筆者にとつて最も興味ある論文であつたが大多數の讀者にとつても恐らく同様であらうと考へられる。南方共榮圈への關心が俄かに昂つてきた今日わが國と南方との間に古來密接な關係が存したことを論證せるこの一篇に期せずして讀者の眼が惹附けられてゆくであらうことを想像すると微笑しくなるではないか。

日本列島が黒潮によつて遠く南洋の島々と結ばれてゐる以上、わが神話や言語やその他様々の生活様式の中に尠からず南方要素が混入してゐるのが發見されたとして或は當然であるかも知れない。然しそれにしても日本文化の形成を考へる上に極めて重要なこの南方文化の研究が從來の我が國では餘りにも閑却されてきてゐたのはどうした譯であらう。この點に深く思ひを致された著者は南方文化の性質を闡明することによつてそれが日本文化は固よ

り、廣く東亞文化全般に對して如何なる關係と意義とを有したかを究明することに努められ、その結果は本書に見るが如き輝しい業績となつて示されるに至つたのである。

その他の諸篇に於ても著者は從來の諸説を一々紹介批判しつゝ議論を進め、極めて妥當と考へられる見解を披瀝してをられるのであるが、その内容をこゝに紹介することは繁雜をおそれて割愛して置く。

なほ本書の卷頭には圖版六葉が添へられてあり最後には三十五頁に達する詳細な索引が附いてゐて甚だ親切且つ良心的なのが喜ばしい。

本書の學術的價值については筆者如きが今更蕪雜な言を連ねるまでもなく、教授の高著が出版後間もなく日本出版文化協會の推薦圖書に指定されたことを言へば足りるであらう。最後に筆者は本書が益々廣く世の人々に讀まれんことを望むと共に教授の研究が獨り學界を裨益する許りでなく帝國の南方政策にも資するところ尠からざるを思ひ著者が更に一層この方面の研究に力を注がれんことを切望して己まない次第である。(竹田龍兒)